

アフリカの稲作 < 第 3 回 >

ギニアにおける天水稲作

ギニアは西アフリカという場所にありながら、2000 年以上の伝統をもつ稲作が古くから行われてきたことはあまり知られていない。ギニアの主食はもちろんコメであり、1 人当たり 90kg のお米を食していると言われている。ギニアの降水量は首都 コナクリで 4,000mm 以上、内陸部でも 1,500-2,000mm と多く、その降雨も雨期(5 月から 10 月)に集中している。ギニアにおける稲作は大きく 4 つにわけることが出来る。つまり、1) 丘陵地や傾斜地の焼畑で行われる陸稲栽培、2) パフォン栽培と呼ばれる内陸小低地で行われている水稲栽培、3) ニジェル河沿いの広大な氾濫源で行われる粗法的な稲作栽培(氾濫源栽培)、及び 4) 海岸低地での水稲栽培(マングローブ水稲)である。ここでは、1) から 3) についての知見を報告する。

山間部や傾斜地での陸稲栽培は天水のみで栽培されている。一方、水稲栽培は、基本的には雨期に流入する自然水を地形にそってそのまま利用するという天水依存型の栽培で行なわれてきたが、独立以後、灌漑施設の導入による水制御を伴った稲作に努力してきた。しかし、雨期に集中する洪水による施設の破壊や、不適切な施設導入・管理もあり、現在でも多くの栽培は天水依存で行われて続けている。

水稲栽培は直播、移植の両方で行われている。パフォン栽培では流水が激しく、直播では種子が流されるため、主に移植栽培で行われている。一方、氾濫源での稲作では場所により直播、移植の両方が用いられている。移植直前に前作の畦や土塊を壊すと言った簡単な代掻きも見受けられた。移植栽培での苗生産は、催芽処理後に水田近くの畔や農道周辺を利用して播種され、約 30-40 日程度栽培される。パフォン栽培や氾濫源栽培では、水のコントロールがほとんど出来ない場所での栽培であるため、植え付け時期も完全に降雨に依存する。このため苗が徒長してしまう場合も多く、この場合は倒伏をさけるため、苗の

先端を切って植えつけている。植え付けも多くの場合、ランダムに行われている。天水依存である移植後はほとんどの場合、水管理や除草作業などの管理作業は行われない。収穫は穂刈りで行われ、収穫後処理も伝統的な方法(圃場における乾燥、脱穀)で行われている。種子は自家採取がほとんどである。このような伝統的な栽培方法のためロスも大きく、収量(ギニア平均で 1.5ton/ha 程度)は低い。

ギニアではコメ生産が需要に間に合わず、多くを輸入しているため、ギニア政府もコメの増産を進めている。2008 年のイネの栽培面積は、栽培面積 83 万 ha、収量 1.45ton/ha、生産量は約 120 万トンとなっているが、この統計はちょっと疑問である。どちらにしろ、ギニアは CARD の第 1 グループ加盟国として、国家イネ開発戦略(National Rice Development Strategy、NRDS)を立てている。その計画によると、前述の現在(2008 年)の実績から目標年である 2018 年には栽培面積 160 万 ha、生産量は約 273 万トンという飛躍的な増産計画を立て、コメの自給と輸出の達成をめざしている。NRDSでは、目標達成のため、NERICAを含む改良品種の導入、肥料・農薬の利用拡大、加工技術改善、灌漑施設整備・改修、人的育成などを推し進めようと計画されている。また、NRDS実施によりGDP向上、雇用創出、農民組織形成、副産物による畜産等への貢献があるとされている。

NERICA は 1997 年に陸稲品種としてパイロット試験で導入され、1999 年に種子増産プロジェクトが開始された。その後、日本の政府出資や民間組織の支援により種子生産が行われてきている。

ギニア人の主食であるコメを自給することは、輸入削減と外貨の流出にとって非常に重要な政策である。政府の行政能力の低いギニアではあるが、多くの農民がNRDS施策の恩恵を受け、コメ増産と生活改善ができることを期待する。



畦畔での苗生産



傾斜地での陸稲栽培



パフォンでの水稲移植風景



氾濫源での水稲栽培